女學雜誌

第二百二十三號目次

社說　事業論○詩仙（万葉集、宗教心なし、貴族的、優弱、長歌長からず、歌の佛性、歌の未來）。
論說　在布哇受洗始末（安藤太郎）。
批評　正行卿○吉野靜○江戸むらさき○國本○愛民公論○天則○作者俳人○新誌書樓○冷風一拂
雜錄　靜女塾主平尾みつ子を訪ふ○按摩某の教へ○躰を洗ふ事○倫理問答○摸倣文學○ミルトン傑作の生る所以○知事の細君に貧民の食を嘗しむ○食物と温度○きよめぬ庭
小說　うき世
寄書　世の貴婦人に訴ふ（万春野史）
時事　逆外國。女學反。板垣退助君。日月と芙蓉。福澤翁故新島襄君。暑きに謝す。學生及世界。財務之より亂雜せん。非深梶之助君
通信　鳥取市女報
女報　但馬、西京、靜岡、鳥取の女報。神戸英和女學校洋行生。天竺の寡婦。支那の赤兒殺。男のウパ。獨逸の女爵。ラマパイ益々熾んなり

Let no one say, the children will not understand it, for thereby he deprives them of their greatest good.—Froebel.

本號

「事業論」は
秀卓些か讀者を益すべし

「詩仙」大尾に
万葉集及歌の未來を論ず

「小品の文」
福澤翁、新島先生、板垣伯

「新發明肖像」
新島襄未亡人の圖

見よ

第二百廿三號
七月廿六日發兌
一冊定價六錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 223. July, 26th. 1890.

目次　第二百二十二號

EDITORIAL: What is the Work for Humanity? On Japanese Poetry.

LEADING ARTICLES: Mr. Ando's Account of His Own Conversion. (Concluded.)

CRITICAL NOTES:- "Masatsura," "Yoshino Shizu." "Edomurasaki" "Kokuhon." "Patriotism," "Tensoku" etc.

MISCELLANEOUS:—An Interview with Mrs. Hirawo. The Shampooer's Sermon. Ablution. Catechism on Moral Lessons. Copying. The Origin of Milton's Immortal Work. The Governor's Wife and the Pauper's. Food. Food and Temperature. Humourous

NOVEL:—"Ukiyo."

OPEN LETTERS.

CONTRIBUTED ARTICLES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

社説　女塾別舍主義○詩仙

論説　在布哇受洗の始末（安藤太郎）○基督事業に對する婦人の心得（獨逸國博士スピンチル氏）

批評　トルストイ伯○獨身權を剥奪すべし○歸朝後の感慨

雜録　家有る屈ち一年の感　往週の慕び家政科の教授に在り○夜更けの星○農家の子弟○人殺ろし○離める人の爲に默しむ○靜女塾主平尾光子女史を訪ふ○さゝめ口語

小説　うき世

寄書　濟貧地案内（下）○哭服人の損するゝんとを患ふ（小島婦語女）

開書　女學雜誌の誕賢を賀す○究詢

時事　條約改正○日本人を殺せし罪人○メソヂスト婦人年會○周期のさゝやき○議員上京の折は○文明國に野蠻人多し○佛國に於ける佛徒　家議員中の信徒○婦人雜誌○本業女學生○時期記事

女報　路見女學校生徒の義捐金○慶應文五の成績○鹿島貴民喩女學校○婦嬰女學校○明治女學校○岡立女學校○ナイチンゲール○女子遊記○篤志婦人○其他數件

WOMEN IN JAPAN.

GRADUATES FROM THE MISSION SCHOOLS.

I.

"The Mission Home": Misses Iiso, Sekiya, Yamamoto, Iga, Mori Kosuge, Kakesho, Kohayagawa, Howe, Lackston, Fiskoe.

II.

We reported that yen 4.50 was lacking to meet the expenses of the conference of the "Anti prostitutional Alliance." "The Meiji Gakko" pupils hearing of it, contributed yen 4 toward defraying it. The contribution was made out of their earnings by means of their sewing, knitting etc.

III.

Two gentlemen of Kagoshima are planning an Industrial School for the poor children, meant to teach them the method of independent livelihood. "The Shoei Gakko" is giving opportunity to poor girls in search of education to carry on the studies free of tuition. Girls deserving of assistance, will on application receive tickets for admission.

酷暑遐禮

巖本善治　星野慎之輔　磯貝由太郎　木村祐吉　山田三十郎　清水とよ子　堀口章三　森田豐　井上藤平　舟橋實吉

客員　波瀬實二郎　寺尾熊三郎

女學雜誌 第二百二十三號 明治二十三年七月廿六日發兌

社説

事業論

維新以降二十三年、世は破壞的時代を去りて正に構造的の時勢とはなりぬ。近年「事業」と云へる一語頻りに世上に流行し事業家と云ふもの丶價格大に騰る、昔しは磊々落々唯だ物を破るを以て大丈夫の美德と爲しけるが、今は精細綿密にして能く事業を成すを以て男子の譽れと爲す。

之れ甚はだ佳なり。輕率にして忍耐うすく、激すると多くして持重するとの乏しき邦民には、深くアングロ、サクソンが事業を成すの精神を要する也。彼の左右に顧慮し、前后に掛念し、上下に尋酌し、分を懸け厘を劃りて微細計らざる所ろなく、之を斷ずるの遲きは泰山の容易に動かざるが如し、然れども一旦動く時は必らず進み、進む時は必らず成し、成す時は必らず守る、其守ることの固き機山の陣の如し、とは英人の大ひに誇る所ろにして、わが邦民の短所とする所ろ也。今の事業家なる者實に此短所を補なひ、此の貧しき地に美田を拓き、此の乾ける心に膏を注ぐとありとせば、邦家の幸福之に勝る者尠なし、吾人は謹しみて之を祝せんとす。

然りと云へども、事業とは抑そも如何なるものぞや、之れ先づ明らかに確かめ置かずんばある可らず。事業とは唯だ業事を爲すの謂か、業事を爲すものは世の始め人の動くとを知りし以來一日として在らざることとなし何をか新たに賞めん。事業とは唯だ業事を組み上るの謂か、業事を組み上るとは子供も之を土砂の上に於てし、農夫庭作りも、之を田地庭園の上に於てせり、亦何をか賛へん。イスラエルの王、天下の主府エルサレムにあり、多くの智惠を得て日の下に作すところの諸の行爲を見たり、歎じて云へらく、嗚呼皆な空にして風を捕ふるが如し、曲れる者は直からしむる能はず、缺たるものは數を合はする能はす、日の下に人の勞して爲す所ろの諸の動作は皆な益なじと。事業そも〳〵何によりて益ある。

吾人惟へらく、人いかに額ひに汗して働らくとも、若し一つの事を爲さずんば万事皆な効なしと。一つとは何ぞや、其の自らを高くし、世の人を高くすると即はち是れなり。夫れ此事なくんば勞働辛苦何の功ほしかあらん、爲に黃金の冠を頂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たくとも益なし、爲に王位万寶を受くるとも益なし、百世の墜れ万代の崇めを蒙むるとも尙ほ益なし、則はち一世に事業家として持囃され、千里の鐵道王となり、万里の大海王となり、幾万噸の鑛山王となるとも夫れ果た何の益かあらん。眞の事業とは、人を高くするとの謂ひ也、眞の事業家とは人を高くするの人也、若し此の一事を欠かば、日に何程の事業の容量を見るとも、其容量は內空ろにして實なし、大道の前に立ちて空林の事業を爲したるにもあらざる也、譬へば万頃の滄溟にひゞき乍ちにして寂滅するが如く、千丈の波浪に接し乍ちにして跡方なきが如し、人は之を事業と云ふ、然れど海邊の松、濱の砂では俄かに之を事業あらずと呼ぶ也。請ふ其の事業に非ざるの理わりを見よ。抑そも事業には、三の要件を備ふ、第一に働らくとなり、第二に成就するとなり、第三に天地間に新たに益したるとなり。前の二つは多くあり、后の一つは却つて少なし、然れども若し此の一つをだに欠く時は、眞の意味に於て之を人間の事業と云ふと能わず。彼の珊瑚島の虫は相合して一大島を組織せり、之れ事業と云ふとを得べき乎、蜂は蜜を吸ひて大ひなる家を造る、之れ事業と云ふとを得べき乎、山は木を生じて鬱乎なる森林を成す、之れ事業と云ふとを得べき乎。理學者云はく、彼等は此の者を取りて彼の者と爲せり、天地間に於て新たに益たる所なしと、吾人は之を以ての故に呼んで事業と爲すと能わず。

ミル云はく、所云る事業あるものは只だ彼を遷して此と爲すのみ、世上の變遷は一に元素の變遷に過ぎずと。然り、石炭は樹の化したるものなり、熱は石炭の化したるものなり、蒸氣力は熱の化したるものなり、多くの製造は蒸氣力の化したるものあり、故に千百の製造は只だ万古の樹木の化する所に異ならず、日は出て日は入り亦其の出し處ろに喘へぎ、風は南に行き又た轉りて北にむかひ、旋り轉りて亦た其の旋轉る處ろに返り、河は皆な海に流れ入り海は盈るとなく河は亦た其の出來れる處ろに還る。嗚呼世上の万事大率ね然り、コロムバス亞米利加を發見せしのみ彼れ亞米利加を造りしにはあらず、ニウトン引力を發明せしのみ彼れ引力を創造したるにあらず、アビシニアの人バベルの塔を積上たるのみ天地間其瓦の元素と土塊の材料とを新たに益したるにあらざる也。左れば、人の爲す所ろ多くは一を動かして二に合はせ之を三となし、三を分ちて之を一と二との二つに成すに外あらず、所云る天地間すでに存するの元素を、組織し、移動し、分解し、

運轉するに過ぎざるなり。あゝ唯だ然るか、吾人は人の事業遂に虫の珊瑚島、蜂の蜜房、山の森林に異なることなきを信ず。人倘ほ之を事業と云はんか、吾人は其の言ふがまゝに任す、然れども吾人の所云る事業なるものには更に一つの優りたるものなくんばあらず、即はち高大なる、美なる、慕ふべきの眞との事業なるものは、倘ほ他に一ありて存する也。

見よ、天地間に於て自由なるものは唯人間のみにあらずや、人間の意思亦た自由ならずと云ふものあり、然れども世に若し自由なるものありとし吾人能く自由と云へることを觀念し得るとせんには、自由は即はち唯だ人間に於てのみ之れあり、人の意思即はち自由ありとせずんばあらざる也。所云る增減することを得るものは即はち自由なるもの耳、故に自由あるものにあらずんば天地間に於て新たに益し若くは長しなへに減ずることある可らず、木の燃ゆるや煙となり蒸氣となり熱となり灰となる、木すでに見る可らずと云へども其躰散じて形ちを變へたり、天地間の元素に於て別に增減する所なき也、大凡そ自由なくして天則に支配せらるゝものは皆然り、之を減ずることを能はざるが故に亦之を增すこと能はず、則はち大ひなる意味に於て新たに一物を益するの事業を之に施すこと能はざる也。但だ夫れ人や、其德之を進むるときは進み、之を落す時は落つ、彼もと自由にして其の進退增減を、天則の器械の外に放任せらるゝが故に、若し奮發して自から進む時は即はち天地間に一の美質を加へたるなり、若し自ら棄てゝ惡に墮落する時は天地間に一の人間を亡ぼしたる也、禽獸魚介の生死增減は天地に益する所ろなく亦損する所もなし、但だ人の靈性の進むと進めざるとは即はち天地間に於ける眞實の損益を來す、蓋し天地間に益を起し損を醸すものは、獨り人類身上の事に限ると云ふべき也。

之を以て自ら高くしたるは其一身の中に一の事業を爲したる也、人を高くしたるは人の身上に於て一の事業を爲したるなり、如此く人間德に進まば即はち大ひなる眞の事業新たに世に出現したる也。上帝之を嘉みし、天使之を歌ひ、六合宇宙之を贊美す。

左れば鐵道を敷き、鑛山を堀り、銀行を立て、會社を組織するなどの事、惣じて此の一つの大本元に向つて志ざすことあらずば、事業として何の益なきに至らん。千百の事業は文明を進むるに在りと云ふ、云く佳し、然れども文明は文明あるが故に善にあらず、其の人を美にし人性を高倘にすることを得る

が故に善きのみ。然らば即はち、何の事業も先づ此の關鍵の目的に向ふて進まずんばある可らず。

君子は器ならず、事業は事業にあらず、たゞ其中に存する所ろのものを貴としとなす。人の偉らきは偉らきて善に進まんが爲めなり、若し善に進まば其偉らきは消るとも可し、仕事を爲すは仕事其のものゝ爲めにあらず、之によりて人性を高くせんことを欲するが故のみ、人性すでに高まらば仕事は滅するとも不可なし。吾人が了れるところは唯是のみ、人は何如にしても立派にあるべし、何如にしても高尚行徳の人物となるべし、宗教も、道徳も、ホームも、節儉も、家屋も、學校も、皆な人を進ましむるの道となるべしとなり。

然るに事業を爲すと云ひて德を損する者は何如ん、事業を成すと云ひて世を益すときは何如ん。吾人多くの君子を見たり、彼れ學校に於て教授し、會堂に於て說教し、世外に立ちて何作する時は、常に聖人の如くなりき、然れども一日身を處ふ所ろの事業社會に投ずるときは、精神にぶり、變消へ、忽ちに狡猾利巧に倣じて、唯一、其の事の成らんを勉む。斯くして昨の聖人は、今の俗人なり。悲しき哉滔々たる世人、未だ眞の事業あるものを知らず、心身しきに流るれども、錢を得れば則はち事業成れりと信じ、啻だ其人の揚々たるのみにあらず、世人亦た擧つて之を羨やむに至る。如此くんば、人を殺ろし其の事業の成るの日は、德性の壞るゝの日あり、人を殺ろして銀行を立てたりとも、抑そも何の益かある。

君子にして仕事に着手するもの、深く警戒せよ。仕事に着手して善に進まんとするもの、亦深く猛省せよ。所云る失敗とは、其仕事の破れたるの日にあらざる也。仕事成るの日、必しも事業の成就したる日にあらざる也。德實に進みたるの日則はち事業の成就したる日あり、此に至らば區々たる金錢の損失と、世上の毀譽と、夫れ靈性に於て何んかあらん。

詩仙（下）

万葉集

貫之が千古の卓識を以て始に歌の德を數へ擧げたるものには、其の長所を殘りなく擧揚はしたると共に、偶たま其短所を明らかに揭示したり。蓋し代々の歌よみの觀念には、遠くして大ひなるもの、纖そかにして幽かなるものゝ、浮び出てたると却つて稀れなり。月花は其旨とする所ろにして、山も、筑波、富士、松山、男山に出でず、海も滋賀、高砂、難波を超へず、川は

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

吉野の川に限り、水は野中の水に留まり、其の墓なしと歎つは、草の上の露、小川の水の泡、木の葉の一片二片散り行くの狀を見たるに過ぎず。左れば貫之が誇る所ろは、歌よみの理想とする所ろにして、而して其理想や極めて低きく、和歌の至つて憫れむべきとを明示する也。

試みに万葉集を取りて論ぜん。万葉集は是れ歌の純なるものにして、和歌の尤とも傷なく、其天眞の咲き開きたるものなるべし、左れば万葉集によりて歌の全体を評するは、寧しろ歌の爲めの僥倖と云ふべし。夫れ、此集の作者及び年代等の事は茲に言ふに及ばず、亦た其中、僞作若くは后代の作の混ずる無きやは之を論ろふの暇まなし、只だその六種の歌、五百八十四人の作、四千三百十五首の吟詠を通覽し、其尤とも美なりと思ふもの耳に付きて、感ずる所ろを述ぶるも。

第一　宗敎心なし

所云る宗敎心とは、必らずしも坊主くさく、耶蘇くさきとを言ふの謂ひにあらず、人生の運命を観じ、天地間の大法を考ふるの念慮即はち吾人が謂ふ所ろの宗敎心なるもの也。然るに万葉集には詩に尤とも大切なる此の宗敎心あるとなし。先づ神を畏るゝとなし、啻に畏れざる耳にあらず、神を以て戀情の比喩に用ゐ、之を詠じて肉慾の希望に當るとあり(赤人、家持娘子の作あり)。次に、天地を畏るゝことゝなし、其の宇宙に感歎するの尤とも大ひなるは、大和の國を美しと賞むるの類のみ、人丸、格を破りて、天を詠じ、月に吟じぬ、歌に云く、

天の海に雲のなみたち月のふねほしの林にこぎかくる見ゆ

春日なる三笠の山に月の舟いづ風流雄の飲む杯に影見へつゝ

輕俏にして嚴粛あらず、試みに之を歌ふに狂句俳諧の心地す、チイツチルスの自然を吟ずると抑そも幾干の懸隔ぞや。最后に、人生を観ずると極めて淺薄なり、其戀は肉慾に過ぎず、毫も清よき獻身的の愛を含まず、其哀しみは喩へば幼な兒が物に驚ろくに似たり、泣けども無智にして深く恨むるとなし、死を見ると離るゝに同じ、幼けなきもの昨日迄で共にありし人の見えぬに不審し、彼れ死せりと聞きて復た來ずやと泣くに似たり、總じて歎くと深からず、怨むと切ならず、況んや悟るとに至りては殆んど絶無と云ふべし。

第二　貴族的なり

万葉の歌人五百八十四人、帝王より下も諸臣諸姓に至る迄で、此内四百五十四人あり、他に僧十七人、女婦九十二人を除

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

くときは、庶人の歌よむもの僅かに廿一人に過ぎず、万葉の集は即はち官員の歌集と云ふべし。夫れ歌は禁裏に生れ、宮中に生ひ立つ、米の價を知らぬ人集まりて天地を動かさんとなせる、詠み出づる所ろ貴族的なると言迄もなし。左れば、民の家の貧しきに歌はずして、奈良の都の荒れ果てゝ馬車の跡なきとを恨み、國富み人足るとを喜こびとせずして年貢の上り豐かにして宮室の美しきとを頌す。偶たま山上憶良が、貧窮問答の歌一首を詠ずるを見る、是れ格外非常の事なりと云へども、其歎く所ろの本旨は、專ぱら貧者のあはれなる狀況にあらずして、里長が無殘に税を取立るの苛酷なるとに對する、亦是れ一種の官臭あるものと云ふべし。

第三　優弱なり

既に宗教心に乏し、故に罪を悔ひ、過ちを正し、刻苦勵精して善に遷らんとするの觀念に至つては、殆んど絶無と云ふべし、左れば玆に道徳上の勇氣活發の如きものを見出さんとするに其の一滴も之れなきは勿論なり。既に貴族的なり、寧ろ官人的なり、故に總へて政府の處置に不平あるとなし、只だ歌つて其德を賞め頌ゆるにあり、支那の詩は隱士の不平に發し、不平の激する所ろ浩何多しと云へども、我國の歌人は元と宮中の相如なるが故に、詠み出る所ろ大率ね頌歌にあらぬはなし、左れば玆には不平に憤ふるの慷慨なし、自由を慕ひ望むの祈願なし、悠々として只だ壽ぶき祝ふのみ也。既に宮中文弱の人の手に發達せり、故に其はた武雄壯大の情に乏し、戰ふとは武人の務めにして殿下の荒雄の爲すとなれり、矛を提げて敵を鏖殺するは、秋波宮女に媚びて腰折を詠ずるに及ばず、丈男、色このみ男、蕃殖して絶へて英武凜烈の事を重しとせず、其詠する所ろの歌の優弱なるは勿論なり。左れば、たまたま男らしきとありとせば、男兒、乙女を爭ひて自殺する事（見菟原処女墓歌）、年少弓をたばさみて獵する事（見振勇士之名歌）の類ひに過ぎず、山部赤人の歌に云はく、

大丈夫は御獵にたゝし乙女等は赤裳すそびく淸き濱邊に

之れ當年切めてもの男らしきとありけり、夫れ如此き人の歌ふ所ろ、焉んぞ雄烈悲壯あるを得んや。

第四　長歌長からず

人云く歌短かしと、之を駁するもの云く、万葉に長歌あるにあらずやと。然れども其の長歌は決して長からざる也、抑そも歌の長きものは、其の文字の多きとにあらずして意ばせの

多きとなり、苟くも意ばせにして多からずんば、千語万言を重ぬるとも歌は猶ほ短かき也、万葉の長歌果して思ひの長きものありや、眞淵云く、

古しへの人は思ふ心一た道なる時に短か歌をよみ、やちまたなる折は長歌になんいひける。

定家亦云く、

万葉の時分には長歌多し、古しへは心深くて歌長きなり、末世には心浅くなれば卅一字につゞめられたり。

左れど吾人は万葉に長歌なしと云はんと欲す、人丸、赤人等の長歌長からざるに非ず、左れど其詠ずる所ろの旨は一首中たゞ一つにして絶へて、八千またの深き意ばせあるにあらず、長歌の末必らず「かへし」の短歌を添ゆ、抑そも長歌自身の本旨は既に此の三十一字に於て盡たりと云ふべし。

夫れ如此く初めより眞の長歌あらざりし也、然るに后世宮中の鬪歌、歌合せ行はれ、即席即吟を尊とみて、深く長く案ずるとを可とせず、於此乎、文字の長きとすら亦宜しからぬととなり、遂に三十一字の躰のみ專ばら行はるとなれり。左れど上世長歌ありて后代に短歌ありしにあらず、歌の性たゞ即席一時の感を述べて、沈痛深長の意を寄するとを不可とし、因習例倣して遂にたゞソンチットに限るとなれり。

歌の佛性

万葉の歌は、短かくして弱く、貴族的にして宗教心に乏し、而して之れ只だ万葉の歌の然る耳にあらず、和歌の全躰皆な即はち然る也、之を詩の本性に準じて欠くる所ろの甚はだ重大なるを覺ゆ、日本の詩豈に海外に誇るべき者ならん哉。

但だ佛教の感化次第に歌に浸潤し、万葉以來年を追ふて之を宗教的になしぬ、此點に於て觀來れば、万葉にも亦一二秀歌なきにあらず、沙彌滿誓の作、及び無名氏、勝部王を傷むる一首、並に世間無常を悲しむの歌の如き是れ也、

世の中を何にたとへんあさびらき
こぎにし舟のあとなきが如と

何んぞ其の悽愴あるや、以后、遍照、素性、喜撰、能因、西行、慈因、寂蓮、蓮性、頓阿、兼好、の徒、和歌に佛見を鼓吹して歌を高めたるの功ほし極めて大ひあり。今の歌人倘は人丸、赤人を以て歌の聖なるものとす、蓋し其の無邪氣にして子供らしく、美にして幼ならしき所ろは、兩歌聖特徵の長所なるべし、然れども詩の本領より論じ來れば、吾人は寧ろ西行を以て其上に置かずんばある可らず、

ところなき身にも哀れは知られけり
　しぎたつ澤の秋の夕ぐれ
枝折せて何は山ふかく分け入らん
　憂ときかぬ所ろありやと

安んぞ彼の淺薄浮靡なるものに比ふべけん。夫れ、佛道の歌に於ける功はしは、歌をして宗教的とならしめたること也、即はち歌を高めて一段の上に登したるものと云ふべし。

然れども佛道はもと完全ある宗教にあらず、其の世を厭ふの觀目は世を忘するゝを潮しとせず、人をして安心を得せしむるにあらず、苦しみて懸念せしむるなり、世を開らきて天地の實相を開示するにあらず、万法を空寂の中に埋めて總べての理性を無みするものなり、如此き宗教の感化は決して國民の爲めに益あらざる也。故に歌は佛道の爲めに深く高くなれり、然れども之によりて病ひに陷いれり。健全清潔のポエムを得んと欲せば、先ず歌を此境界より救はずんばある可からず。

歌の本來

歌の改良法は大ひなる問題なり、然れども先づ歌の長短所を補ふを以て其第一着手の道となす。

歌の優麗にして温雅あるは、一は日本人民思想の爛熟せる處ろあり。テイン云く、英人の詩の沈深壯大なるは、其風土の霧深く波あらきが故にありと。然らば日本人の歌の、富士に似、櫻に似、滋賀のさゝ波に似るもの、亦因緣の去りがたきものある也。吾人は必らずしも根底より之を改めんとするに非ず、國粹の美は長しなへに保存せんことを欲す。

されど、其宗教心なき處ろには宗教心あらしめざる可らず、有害なる宗教心ある處ろには健全なる宗教心あらしめざる可らず、蓋し詩に大いなる清き宗教心なきは詩にあらざるが故也。

其弱き處ろは強くせざる可らず、歌は人心を現すのみならず亦人心を化す、故に其弱くして強からざるは亦た大和の民をして永久に弱からしむるもの也、歌をして士らひの吟ずまじきものたらしめ、自由を歌ひ、慷慨を歌ひ、大江の決するが如く、雷霆の轟ろくが如く、山岳の崩るゝが如く、万馬の嘶なくが如く、波濤の寄するが如きとなからしめ、只だいつ迄も、なよ〳〵と、すら〳〵と、乙女の夜泣むが如く、幼な兒の書讀むるゝが如くあらしめんとは、邦家人心万代の悔み也。之れ改めずんばある可らず。

貴族的の點尤ども打破すべし、歌は貧しきものゝ爲めに詠じ、艱めるものゝ苦しめるものゝ爲に歌ひてこそ鬼神も感泣するなれ、雲上の食客、天

津乙女に戀々して、假令ひよし恨死するに至るとも、其苦吟する所ろは左して世を動かすに足らざる也、歌は第一に平民的ならずんばある可らず。

以上三事の改良を施さんには、先づ詩仙の極めて尊とむべきとを明し、俗人の決して歌の神靈を犯す可らざるとを示し、大なる愛國者、大ひなる哲學者、即はち目下の大ひなる英雄の任じて詩を詠ぜんとを叫び望むに在り、區々たる語調韻格の議論は三文の價値もあるなし、玆に大詩仙出でば其人の吟詠は自然にして調和すべし、彼れ天地の調和を直覺し、世道の調和を認識す、苟くも調和に逆らふものあらば亦た一層烈吟すべし、其吟ずる所ろ惣べて調和にあらざるとなし、於此乎、其半句隻節皆な翕然たる音樂にあらざるはなし、語調韻格は自づからにして成らん、故に吾人は先づ大詩仙の起らんとを祈る、謹しんで大詩仙の起らんとを祈る。

女學雜誌第百三十四號以下三號に連載せる「將來の和歌」の說參觀せば幸わひなり。

此程少しく故ありて主の御惠を知らぬ人を思ひまた我身をかへりみて

けがれにしからだの中につゝみては
清きみたまもひかりなきかな

論説

在布哇受洗の始末（下）

安藤太郎君演述

扨前にも御話致した通り何分讀む氣に成りませんでした聖書が再び手に着く樣に成りまして先づ神丈けは有ると見認めが付きましたが是より猶一層困難を極めましたは耶蘇は神の子か但しは唯の人間かの一問題でありました元來如何なる耶蘇敎の反對者でも耶蘇は豪傑とか又は聖人で孔子や釋迦と併立する者だ位の事は通例明言して居る樣ですから人間と見て擧め立て升分は何の雜作もありませんが若し之を神の子と見認むる段に成りますと耶蘇は我々の身の上に容易ならざる關係が出來致して參ります其次第は先づ我々の先祖ハ神に罪を犯したるより我々ハ子々孫々神の罪人と生れ來りて孰れも神より至當の刑罰を受けねばならぬ譯であり升處慈愛に富める神は之を罰するに忍び玉ハず兼て我々の先祖に約束し玉ひし通り其獨り子なる耶蘇を自今一千八百九十年前猶太國「ナザレ」の處女「マリヤ」に降誕せしめたり左れバ耶蘇にハ三十三年間此世に在りて人々に悔改めの道を敎へたる後預言の通り我々の罪に代り身を十字架に懸け死後三日目にして甦生り人々に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

出現したる末昇天に及び父ある神の右に座し彼所より生ける人と死せる人とを裁判せんが爲めに來り玉はんとす故に我々には今日此試みの世の中にある間一刻も早く自身の罪過を悔ひ改め聖靈の洗禮を受け「キリスト」の救を仰ぐべし不然時は獨り此現世に於て禍殃憂苦を蒙る耳ならず未來に於ても永遠無限の刑罰に陷いるべしと申事にて「キリスト」信者たらん者の第一番に篤と心得べき眼目たるは私が今更喋々する迄もない事と存じ升然るに一と通り神有りと見認めました者にも此等の箇條は何分にも右から左へ得心致されませんでした先づ其次第を申升れば第一に神は全智全能にして何事でも出來ざる事なき者であり升のに何故人類を造るに斯ばかり爲して決して惡を行はざる樣には造り玉はざりしや不審千万なりとの疑が起りました又我々を凡べて罪人なりと判斷せらるれども他人は不知私には是迄人殺し火附竊盜の如き公罪は勿論毫も良心に恥べき所業は決して致ひたる覺え無之と自身で無罪宣告に及びましたソコデ肝心なる「キリスト」の救が一向必要でなくなりました夫より靈魂の不滅と未來の裁判の點に至りましてハ書生の頃より佛法の地獄極樂を馬鹿に致した癖が何處が何處まで附て廻わりまして何分にも其道理を研究する了簡に成りませんでした故折角例の冊子に丁寧反覆して讀てありました箇條も一向讀む氣に成りませんで再び福音書の研究を中絶致さんとしましたが去り迚是程迄に辛抱して調べて參つた「キリスト」教を今更半途で見限り升のは如何にも殘念ですから又種々雜多の書物を引出し段々吟味して見ました處靈魂の不滅と未來の裁判が第一番の故障で是れさへ分れば外は格別六ケ敷くない樣に見えました扨前にも申した通り一旦神ありと見認めの付きました以上には先づ以て神が我々人類の身體精神を如何樣に造られしや又其周圍の萬物を人類の爲めに如何樣に組立たるやを取調べて見升のは此際必要の事だと存じ夫から夫へと考へて見ました處神の我々人類の都合を謀り注意を加へらるゝ事は實に何共譬ふるに詞なき次第でありました然るに斯くまで人類の爲めには拔目なく世話せらるゝ神が如何なれば人類に取て最も肝心なる道徳の一點に於ては善を爲すも賞する事なく惡を行ふも罰する事なくして唯此一條のみは不完全なる人智の教育や法律にのみ打任せ更に不顧と申す道理がありましよふか只以辻褄の不合次第柄でありますす若し又愈人類は此世限りの物にて善人も間が惡いと艱難辛苦の其上に短命で相果ても夫れ切り又惡人と雖も時運次第で

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は富貴歡樂心の儘にて天年を全くしても夫れ切りにて如何程全智全能なる神でも此れ丈けは致し方なき者である日には人間の社會ほど恐ろしき者はなく又人類たる銘々ほど哀はれな動物はないと思はれます併し先程も申升通り斯く迄人類に深切なる全智全能の神が決して我々を其樣な恐ろしく哀はれなる有樣に捨置かるゝ筈が無いは明白に分つて居り升からそふして見升と靈魂の不滅は即ち人類の他の動物に異なる要點にして未來の裁判は萬不可止の事實と慥に合點が行きました實に此の三ヶ條は私に取ては「キリスト」敎諸難問の鍵又は謎の題とも可申者でありまして此れが分明に解けますと一度に前に述べましたる我々が罪人ある事も神が人類を造るに善惡を選ぶの自由を與へ玉ふ事も「キリスト」の救の必要ある事も又引續て「キリスト」は神の子たるべき事も盡く氷解いたし露ほども不容疑樣に成つて參りましたそふすると何やら夢でも醒めたる樣な心地が致して遂に洗禮を受けましたは即ち一昨年七月十五日の事でありました。

扨右は私が洗禮を受ける迄に決心の出ました由來の荒増であり升元より今日から考へて見ますと論說の立方が隨分とも迂濶な上に誤解の廉も不少樣に存じ升が夫ても是れが神ありと信じ「キリスト」を救主と見認めました根本で私に取ては餘程の幸福でありました然るに馬太傳第五章に心の貧しき者は福なり天國は即ち其人の有なればなりと申す通り若し私が夫れこそ一丁字も不知して心が眞に赤貧空虛で小兒の如くにありましたなら「キリスト」敎の眞理は一も二もなく會得する事が出來たでしよふが何を申すも御覽の通り心の庫には我羅苦多道具が例の變則で亂雜に推込んでありましたから何分其庫内へ眞理の入るべき寸隙もありませんでした夫ゆへ是迄は聖徒や說敎が庫の戶口に音づれましても庫番は皆斷りを申して通行を許しませんでした然る處此度は斷り切れぬ場合と成り暫時眞理を庫の戶口に待たせ置き庫の内より例の雜物を段々取出して其跡へ案内至したと申す譯合であり升夫でもまだ幸な事には私の庫の雜物は御承知之通り孰れも手輕な品物故運び出す段に成り升と格別手間も掛りませんでしたが世間の方々の心の庫には貫目の有る物品がシカモ正則で隅から隅までギツシリ詰め込んであるのが澤山にありましよふから夫て眞理が如何程音づれましても庫番は一向耳にも不掛又はケンモホロゝの挨拶で拒絕致し升のが一般である樣に存ぜられます併し「キリスト」敎の眞理に付ては論より證據が澤山にあり升か

ら皆様の内若し未信者の方があり升なら何卒御庫の貨物を何程か御運出しなされまして眞理に萬歳を御與へ下さるゝ様失禮ながら御注意申し升。

山寺の春の夕ぐれ来て見れば　入相のかねに花ぞちりける（能因）。

わび人のわきて立よる木の本は　たのむかげなく紅葉ちりけり（花山僧正）。

批評

正行郷　幽泉子

新撰軍歌集の第一として、苑道添千代氏の作にあれる「正行郷」四條畷の段を讀む、何如なる格調にて歌ふやらん、一誦して別に心ちよく勇ましきの韻あるを覺えず、中にも

病の多き身なるゆゑ○○○○　空しく月日過すうち○○

もしや病に冒されて　病辱の上に玉の緒の

絶る事しも有らば○○○

の如き、彼の昔し新體詩とやらん云ひけるものに左も似たる節あり、附録として後に添はりたる、

吉野評　幽泉子

の唱歌は、優雅温靜にして遥かに優りたるを覺ゆ。

江戸むらさき　ちよ

短かくして讀むきあるは俳諧なり、雜誌中の俳諧者は蓋し「江戸むらさき」か。其の三號迄で讀れ讀むゝ味ひいよ／＼深ゆきを感ず、われは太たく俳諧を嫌ふものなり、左れど此種の雜誌正に一なかる可らず、二あらんとは願はず。

國本　新諦子

文の一變するや吾人大たく歎けり、其の再變して「國本」となるに及びては、更に長歎せざらんとするも得ず。云く、國本の主義は、獨立不羈にして正理公道を固守し、政治經濟をば網羅とし、公明の批評者、正確の判斷者となるにありと。之れ今の時勢に用なしと云ふにあらず、然れども彼の歴史的、尤とも正確なりし第一世「文」の、此に全く其跡を絶つに至りては、世の學術の爲めに深く悲しますんばある可らず。

愛民公論　新諦子

必らずしも秀拔なる大卓論ありと云はず、必らずしも偉麗華飾きて鬼を泣かしむると云はず、然れども其議論の眞實にして價値に富み、深く民を愛し國を愛するの雜誌に灼々たるは、近時雨の如く生ずる雜誌中に於て、われ愛民公論の只だ一層目立ちて見ゆるを認たむ、願くは健全にして益壯んならんことを。

天則　推理學人

其の號三號より改面したり、松栢は老ゆれども志つて床し、抜竹は若やげども翹き所ろあり、改面後の天則、更に面白きのみならず、亦た頗る眞實ならんとを祈る、但し今後は追々に新説を見るとを得べき歟、之れ先づ賀せずんばある可らず。

作者佛人　ちよ

小説家の小説論大方た一更したれは、喜こぶべきの進歩なり。くだ／＼しき牡丹餅主義に厭を生じ、僞消稍やくに流行す、喩えば艶麗の境ひ一たび變じて、而々淡々に入るが如し、たゞ之れ亦た久しからじ、總じて文學界此頃の歩みは、正路に進むの流行きなめれ。

新誌雷樓　幽泉子

竹の子すでに東さるり、開設いたづらに字を朱やすとなし、雜誌界靡らしき寂少なくして實ろきもの稍や若蒼す。新聞紙は價上げの相談に忙がはしく、本屋は賣れぬにより円若暑熱の苦しきよりも苦し氣なり。文字の境ひにさはしと云ふと能はず。

冷風一拂

うた子

名吟のひゞき、彼方此方に音高くありぬ、此上一きわ美しく、清く、高くなれかしと、只管に祈る。

日本評論、百合の舍、秋と云ふ今樣に、

萩の上風身にしみて　哀れいやます夕まぐれ
涙もろくもはちすには　一ト村雨のはら〳〵と

讀賣新聞、露伴の雜詠に、

對レ蝶欲レ語一片心
飛ぶ蝶に我が俳諧の重たさよ

欲レ剃レ髮
いざ行むとてもうき世を立出て
何しら雲の山のあなたに

いらつめ、美妙齋、賴朝の墓に、

岩をもさきしもの丶ふの　こぶしも今は岩のかげ
ふみにじりたるあほ草も　今はかしらの上に生ふ
涙の音ばかりむかしにて　月は今日までまどか也

歌は魂しひの聲、神の直ちに臨こし玉ふ所ろ也。……

雜録

靜女塾主、平尾みつ子女史を訪ふ（三）

生野ふみ

夫より漸く現時の問題に移り、女子教育の意見幷に目下の女子教育に關する批評如何と問ひたるに女史のいはるゝやう是は前にも一寸申たるがごとく僕は矢張細君として教育するが第一に宜しき樣に思はる全體今日の女子教育たる何れの學校に於ても教といふ方は隨分行屆きたる樣なれど育といふ事に至りては如何あるやに思はる是其憂ふべきの事なれば僕の塾にありては教へるといふ事よりも寧ろ育てるといふ方に充分に意を注ぎ居れり故に智と德と何れを先にするかといへば僕は德育の方を重んじ居るなり而して又體育の事に就ても余程注意せねばならぬ事ありとおもふなり高尚なる智育を授けんとせば能く夫れに適當するだけの體力を具へしめざる可らず然るに今の婦女子たる往々身體虛弱なる位にて分に過ぎたる智育を受けんとするを以て却て爲に健康を傷け一もとらず二もとらぬ事となることあり僕は深く是等の事に心を苦しめつゝ居るなり其は單に女子其人の爲のみならず之れによりて生るゝ子供に影響を及ぼす事なき乎を懸念すればなり凡て教育

なる事業は實に至大至遠のものなれば其教育家たるものは宜しく深く慮る所なかるべからず然るに今の教育家たる往々現時の形勢にのみ固着して種々に說を立つるものもあれども僕は教育家たるものは少なくも十年の行に於る結果を豫想するだけの識見を存せては叶はぬ事と思へり故に僕は現時よりも將來の事に就て深く慮るに是非共德育と體育といふ事に就ては今日の女子に於て其素を養ひ置事が大切なりとおもふなり其は今の女子が十年の後に於て第二の國民の母となりたる時其國民に大なる影響を及ぼす可ければなり斯くいへばとて僕は敢て智育を輕んずるには非ず然れ共今の女子教育の方針が智育の一方に傾き居るを以て若し此儘にして十年を經る時は夫れこそ大なる不都合を生ずべしと思ふが故に敢てしかは云なり只教育家たるものは須らく眼を遠く高き處に着け而して第一に國利民福といふ事を心に懸け成効を永遠に期するが專要なりと思ふなり但し僕は目下の女子教育に就きて批評を爲すことは好まず其は人各別個の意見を有するものなれば僕に於て缺點ありと認むる事も他にありては尤も長所なりと思惟するやも知れず而して僕が其缺點なりと認むる事の果して缺點なるや否やも亦未だ知る可らざれば僕は敢て其條件を擧げて是々が女子教育の缺點なりとはいはず只其教育者たる人に於て今申せしが如き覺悟を存せらるれば夫れで充分なりと思ふなり只彼新聞記者などが時々其紙面の寂寥を補はんとて種々の臆說を捏造し些細の事を針小棒大にいひ觸らして間接に女子教育に妨害を與ふるが如きは甚だ憎むべきの事にして而も其害の大なるものなれば成るべく是等の讒誣の入らざる樣各學校に於て注意せられ度事と思ふのみと。夫より妹は又女史に、

修身科の標準如何

と問ひたるに女史のいはるゝやう僕は主に儒道に據るつもりなり而して基督教にもせよ佛教にもせよ取るべき處は之れを採り適宜に取捨折中したる後之れを修身科の標準とせんと欲するなり尤も僕は今日までに於て佛道は隨分是を調べたれども基督教に至りては未だ詳に之れを知るを得ざるを以て目下專ら夫等の書物を繙き居れり他日夫等の意義全く了解するに至らば更に再び考ふる所あらんと思ふ云々。

按摩業の教へ

しみち

下谷に鍼療業と云ふ按摩療治渡世の老人あり、家貧しく世渡り辛けれども、多年敎へを奉じて信仰尋常ならず、朝夕神に祈り

て万事を其の命の儘にあし、膝を容るゝ餘地あきの茅屋に住まひ乍ら、安心滿足王侯貴人も尙ほ及びがたし、人之と物語れば温乎として威あり、帝王も決して之が心を奪ふと能はず、甞て感謝して云はく、

天の神よ、アナタは、千万人にも優りたる王國を、余れに與へ玉ひしを謝す、と。

實に彼は此の得がたきの王國を掌握せしなり。近頃ろ病重く遂に死す、終に臨みて信仰いよ〳〵固く、之を見舞ふ人あれば反つて之を慰勵したり、安愉すでに天國の人の如く、屋傾むき暑氣蒸して炎熱堪へがたきの隘室に、一女を傳道に遣はし特更ら之を招き歸さず願はくは成効あれと只信じて樂しみつゝ、老妻いさゝかの藥を盛り他に味はふべき一つの品だに無き枕の上に安臥し、平然として眠れり。吾等その一生の聖にして潔ぎよきを觀、敎を受くると一と方ならず、彼は說敎師よりも、僧侶よりも、道德學者よりも、尙多くの敎を遺せりと思ひき。

躰を洗ふ事

み、れ、

身躰の汚芥のたまると云ふのは脂が出るからです、夫れ故水だけでは洗ひ去る事が出來ません、石鹼は人の皮膚を洗ひ淸めるに極く宜しひものです、石鹼は脂を溶かす力があり、亦上皮を柔かにする功能があります、皮が柔かにある故之を洗へば垢と共に落ちます、夫れ故に石鹼にて洗ふ時は古き皮はあくなります、余り長く洗ふと皮が薄くなる事があります、若石鹼を用ひる時痛むならば皮膚が弱くあつて居るのですから始めに少し用ひ夫れからだん〳〵多く用ひる樣にしなければいけません。

倫理問答

井上二郎

明治女學校にて、此頃ろ倫理の試驗ありける、其問答の樣を傳へ聞けるに、

一　罪の尤も惡むべき者、德の尤も貴むべき者、何ぞ。

二　定九郎の與一兵衛を殺すと、師直の判官を辱かしむると、勘平の定九郎を擊殺したると、大星由良之助が敵を擊てると、道德上優劣の段階何如ん。

三　倫理上、平の重盛を論ぜよ。

四　幸福を生ずるもの即はち善ありと云ふ說、是か非か。

答ふるもの樣々なれど、大方は同じ、今ま其中の一つ二つを聞くに、

一　罪の尤とも惡むべきは、恩人に報ひを爲ざるのみなら

ず反つて害惡を反へすと也。德の最とも賞むべきは、己れに惡を爲したる人に善を反へすと、即はち己の敵を愛すると也。

二　定九郎は人の財產を奪ふ上に人の生命を取れり。師直は人の名譽を損する上に而も己を益せん爲に人の己れに賄賂せざる爲に人を辱かしめたり、故に名譽を傷くる罪の中の尤とも大ひなるものなり。勘平は誤まつて殺せしにて道德上殺人罪を犯せしと云ふ能はず。由良之助は敵を擊ち、世の惡人を絕たんと心掛けしなれども、既に人を殺すと云ふとは宜しからず、歯に向つて歯を償ふは最美の德にあらず、惡しき手段によりて善きとを爲さんとするは倘ほ可ならず、其頃の世の有樣を考ふるときは多少恕すべきとありと云へど、今ま之を倫理上より論斷する時は欠點少なきにあらず。左れば、勘平第一、由良之助第二、師直第三、定九郎第四なるべし（他の一生云く、由良之助は善を爲し義理を盡さんとの心掛ありき、勘平には無し、一は積極的に勉め、他は消極的に無罪となれり、ゆえに由良之助まさると）。

三　○甲の答に云く、死を祈りて忠孝を全くせず、且つ身を殺さんとするは善きとにあらず。

○乙の答に云く、重盛は忠孝とも極點に達し、親を諫め君に忠を盡し命を天に任せたり、我等は醫の手もて或は病ひの癒へしとあらんと思へど決して然らず、命は天に在るものなれば其死を祈りて父を諫むるは善行なり。

○丙の答に云く、其身の爲に自ら殺すは宜しからず、左れど重盛は父の爲に祈りて死するなり、獻身の自殺とこそ云ふべけれ、絕へて欠くる所ろを見ずと。

四　人を苦しむれども其事の善きものあり、人を樂しますれども其事の惡しきものあり、外科醫の人を療治するとき、歯醫者の歯を拔くとき、幸福必らずしも善にあらぬとを知る云々。

摸倣文學

碓氷山人

嘗て之を西陸の文學者に聞きぬ、曰く今を去る四百余年の昔ラテン語の再興によりて古代の文學彫刻等を研究するを得たり、印刷機械の發明に遇ひて更に之を廣く世に示すに至りぬ之に依りて世間幾多の人心を皷舞振作し、種々の結果を現はしぬ、倘今より後其影響久しく止まざらん、されど此處に一の大弊起りけり、一般通常の人は徒らに古を倘び、今を賤ん

ずるの風とはなりぬ、只古人の優れるを知つて今人の及ぶ可からざるを嘆じ、後世の者は古人の著作に模するの外亦爲す能はずと思ひ定けり、故に今の著作を品評するに當り、其古物に近似するの如何を標準とせり、されど是大家の出ざりしが故のみ、眞正の大家出たらんには斯る弊には罹らじ、たゞ古を貴ぶと共に自ら創作新著する所あればなり、伊國大家近世詩人の元祖ダンテを見よ、ヴォルヂルに摸して更に彼に優る、アンゼロ、ラファエルの徒が彫刻に於ける亦斯如し、ヴヰンケルマンのラファエルを評せし如く其古人の作に似ざるといふを以て卑下し去らば其誤謬少なからざらん、只世人が古代の者を好むといふを以て孜々汲々之に摸して日も足らざる者こそ凡庸尋常の人なれ、詩人に至つては殊に注意して創作をつとめ、自家の特色を現すべし、タッソー、キャモインの作今日に愛誦好吟せらるゝ所以はヴァーヂル、ホーマーに類似するが爲ならず、他に優る所なるが故なり云々。此一節を今日我國の文學海に比して余は轉た感慨に堪へず、數年來の有樣に徵して多數の文學者が摸倣を是事とするを知ぬ、大家出でゝ獨立の旗を文界に飜すは何れの時ぞ、特得の技を學界に現すの偉人は何處にかある余は我國文學の爲に大家偉人の輩出を切望す、

ミルトン傑作の生る所以

蕭

英文學史中に羅布散見する幾多の詩人中、ミルトンを第一位に推すは古來の公評ならん、然り彼が衆に擢んで他を凌ぐに至りしもの抑も如何、或人は彼が失樂園を現はすのインスピレーションをアンドリウの戲曲（千六百十三年に發兌せる「ル、アダモ、サクラ、リプレセンティテーション」等）に歸しぬ、他の人はテラモの著ダス、ブックフペリアルに原づくと云ふ、亦或は云ふ、バルタスの上帝の一週間及ひ其間の事業」と題する書に因るとなし、或はフレッチャーの作に負ふ所あるはミルトン自ら公言せりと云、其他ビートンのクラス、チヴタイ

ムにありといひ、ダンテのデヴアイン、コメデイーにありと云ひ、人各見る所を異にす、思ふに是皆一を說ひて未だ其二を盡さゞる者なるべし、何となれば彼がインスピレーションを受たる者一二の書冊に歸すべからず、必らず他に原因ある可ければなり、彼が密室に閉居し、安樂椅子に倚り、身を背ろに傾け、靜閑なる所に明燈を掛け、沈思默慮し、時に或は數十行を書き流す、流水の斷岸を奔るが如く、時に終夜腦力を費して遂に一句を得ざりしが如き彼が眞正のインスピレーションを待つて筆を下せし所以なり所謂眞正のインスピレーションは何處より來りしか曰く宗敎にありとす、西人曰く眞正の宗敎に因つて始めてよき詩を作爲するを得べしと、蓋し至言あり、是傑作の出る所以。

知事の細君に貧民の食を嘗しむ

報知新聞に記すらく。仙台東三番丁に住する開業醫鈴木赤人氏は兼て公共衛生に注意し且つ慈善の心深き人なり近者米價頗ぶる騰貴し貧民の飢渇に迫るもの日に增し多きを加ふるを見、斯くては衛生上にも大なる影響あるべしとて一日、同市内北方にて兼て貧民の巢窟と聞へたる處に至り其貧民の狀躰を視察せるに誠に目も當られぬ有樣其の食料といへば名も知れぬ野草に豆腐カラ又は第二師團の殘飯等を加へて糊の如くなしたるものなりしかば氏は慨然として其の食殘り幾分を請ひ受け直ちに松平宮城縣知事の邸に持參し其の夫人の前に差出して之を嘗らしめしと。

食物と溫度

香軒

金石草木等の如き無機物は外界の溫冷に從つて其熱度增減すされど有機物に至つては即ち然らず、是れ其身躰より熱を發するが故なり、若自ら熱を發す事なくば外部の溫度と共に其熱度に差違を生ずべし、故に熱を生ずる機關の衰弱愈甚しければ外部の溫冷に感ずること烈し、外部の冷かなる空氣に接し、熱を散ずる時は熱度を養ふの用意を要す、此に至つて上帝の攝理の妙あるを驚嘆せざるを得ず何となれば外部の溫度冷かなる夜間は光り照らさず、四面暗黑となり、動物は多く棲寢に歸りて、寒冷を凌ぐの組織あればなり、ドクター、ドゥレーパー嘗て文明人の食物は自然に天理に合ふ由を述べたりき、其言に曰く今日文明國の人々が飮食を爲の習慣はよく天性に合ふ、野蠻人は時に暴飮強食をなし、亦斷飮不食する事あり、文明人に至ては感觸し易きが故に斯る事をなして命を繫ぐ能はず、食物の量及時刻を確く定め、朝には粗食を取り、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

日中には滋養物を食す、是只に習慣のみに非ず、日夜の温冷に準ずる天然の方法と云ふべし晝は暖かきが故に朝には粗食を以て足る、夜は寒きが故に晝滋養物を用ひて温度を養ふの用意となさゞる可からず云々。

きよめぬ庭　其十八

洒落齋主人

口は禍の門

人の身體造れるうちには諸々の器ありて、皆それ／＼の作用をなす。眼は物を視、耳は音を聽、手足の作用はものかは、胃腸肺心の臟腑こと／＼く得意の作用あれども、一の器にて二つ以上の作用を兼たるものぞ少き、眼ものを視れども視るにとゞまり、耳音を聽けども聽くにとゞまる、たゞ肺臟の如き心臟の如きも主なる作用はみな一つにとゞまる、さるに一の器にて二つ以上の作用をなすはそも口なる可し。口は物を食ひ、之を消化すのみならで、呼吸を爲し、言語を發するの作用をかねたり、世に勝れたる作用あるものは復たすぐれて害を爲すものなり、天下を治むるの能力ある英雄豪傑も、また己の爲人民をなやますことなからましかは。最もたよりよき立憲政體は、政黨の闘爭を起す害あれば、最も神聖なる可き君主專政は人民を壓制するの弊起る可し。痙攣搐搦僅かに〇、〇一瓦の小量を用ゐれば、瞬間にして平愈安眠を得せしむる莫兒比涅は、また僅なる分量の相違にて人命を害ふ。價高からず光明にして、いやが上に容易く得らる可き石炭油は、僅かに一盃の油もて幾萬の財寶を灰燼に歸せしむ。口とてもまたさる作用あるにより、それに伴ふの弊害これほどまでに大なるはなく、國の亂れ、人の爭ひ、多くは口より起り、數多き疾病もその本源を尋ぬれば、口より來りしもの十がうちには八九ならん、さればにや、口は禍の門と云ふ。害多くして利少きもの世にあまねし、利と害と相中するもの世に少し、利多くして害少きもの殆んど見ること稀なり。

今よりはほど遠からぬ昔、墺利亞國ウィン府に通ふ鐵道なんありけり、その上等客車のうちに兩人の客なん乘り居たり、そが一人は年の頃六十路の坂一二段ばかり超えたらんほどにて、申の時ばかりなるフロックコートをつけ、黒き中高の帽子を頂き、いと人品よきさまなり。また一人は前の人よりは五つ六つは弟なる可し、また巳の時斗りなるモーニングコートを着け、黒き高き帽子を冠りたれど、前の人よりは人品の少しく劣りたる如く見えしは、僻眼の爲なる可し。後ある

老人前なる老人にえしやくなしつゝ、旅は同伴世は人情とやら、此の一つ客車に乘り合はすも他生の縁、卒爾ながらもの申さん、御身は何地迄何用にて渡らるゝにや、と云ふに前なる老人もいと慇懃に禮を返へし。よくこそ問ひ給ふたれ、わなみはウィン府のさる方に女を嫁がしあるに、そを訪ねんとてまかるなり、となん答へける。後なる老人そは似よりたることもあるものよ、吾なみも女を嫁しおけるを訪ねんとて行くものなり、御身の女子はいかなる方に嫁がれしや得知らねど、わなみの女の夫と云ふは、ウィン府にて一二の指に數へらるゝ豪商にて侍り、そが家は市のいとも繁華なるところに在りて、七階の高さあり、中には廣き庭もあり、また泉の噴き出るもあり、客室食堂なんど云へば、床の大理石もて填木の如く造る、壁にはシャーキ、ローマの畫伯が、精神を盡したる繪畫數千をかゝげ、床は日本支那の、古代今世の磁器又は織物にて飾り、器具はエラロップ中に名だゝる製造場又は工師の手になれるものを備へ、召仕は幾許人、馬車は幾輛犬は何疋飼へり。四季折々には珍草奇花を庭に集め、印度の伽陵頻迦はものかは、日本の時鳥などあらゆる名鳥を其所に集へて、舞踏の席を開き、上は皇族大臣より、博士學士朝野の紳士貴女を招きて、饗應をなし、萬里の波濤を送り來りたる各國の食器、千年の歲月を經たるボルドーの葡萄酒、山の如く岡の如くにつみなして酒宴を張り、一宵の價千金はものかは、幾萬の黃金を散して汎く交際をなすものから、あまねく人にしられ尊ばれて、ウィンの府廣しと雖ども、吾なみの婿の居らざるときは、火の消えたる如くなりと人は云へり。女もちたる身のかゝるところに之を嫁がして、行先き長からぬ老の身に、そが榮をみることの樂しみ察し給へかし、人の吾なみを羨むも實に理なきにはあらじ。と鼻うごめかし聲はりあげて語りしが再度辭をつぎて。さればあり、袖すり合ふも他生の縁、こゝにて見まゐらせたるぞ幸なる、わなみ紹介す可ければ、一度は婿が家にも訪ね給へ、アナ忘れ居たり、御身の婿がねはいかなる御人なるか、わなみの婿を知り給はざることのある可き、そも御身の女子は、何方へ嫁ぎ居ますぞや、と問はるゝまゝに前より默然として聞居たりし前の老人は、いとおち居たる面色して

問はるゝに答參らせぬはいと失禮なれば申さん、吾なみの女と云ふは當國の皇帝に嫁ぎて皇后となり居れば、定めて御身の婿がね女子にも、會ひ給ひしこともありなん。

もの云へば唇さむしあきのかぜ。

小説

うき世（其十）

かほる

木靜かならんと欲すれども如何にせん風止まず、子養はんと望めども如何にせん親待たず、余が幼き時より父上は憂苦しみに遇ひ給ひければ、余は常に父上を慰めんと思ひぬ、余は學校の課程を終らんには父母に孝を盡し、老ひの月日を樂しく過ごさしめんと希ひぬ、アヽ父上は逝き給ひぬ、余やもと薄命、剰へ父に事へて年を盡さず、孝ならんと欲して孝なるを得ず、如何なる不幸ぞ、思ひ廻ぐらせば來らん世こそ恐ろしけれ。

余は流るゝ涙を拂ひつゝ手紙を讀みぬ、余の身の上の事につき父上は種々の言を云ひ遺し給ひけり、そが畧ましを記しありき、曰く早く善く學びの道をはたし、家を持ち、身を立て母上をよく養ふ事をなゆめ忘れぞ、我なきあとによき壻を娶げて家名を顯はしね云々、余は讀み終つて聲を放つて泣きぬ聲天にも徹したるべし、なき父の魂魄死出の山路にて如何聞き給ひけん、泉なす涙に三途川の水の増りなば、愛する父上歸り給はん杯思ひけり、花水に誘はれ散つて流る、水沫に行く、行ひて歸るなし、父上なども歸り給ふべき、歸るべしと思ひけるは迷ひなりき、アヽ。

故郷に歸らんには數日の旅路をなさゞる可からず、父上失せにしあとにて歸りたりとて詮すべなし、都に止りて物學びに勉め勵めと手紙の端に認めたり、されど余は數日の間茫然落膽し、なさん樣も知らざりけり、馴れ親しめる友どち來りて慰め呉れぬ、七日程經て書を讀み始めたりき。

人間到る處に青山あり、骨を埋むる墳墓の地なかるべき、異境の土と化するも甘んずべし、况してや世の憂き惱みをや、是余が常に考へし所なりき、憂き惱みに遇ひて之を避けんとにはなけれども坐ろに心悲しく覺えぬ、父上在ませし時より僅かの學資によりて貧しく學びの道をたどりけり、父なきあとには如何に母上は窮乏し給ふらんと思ひ、先きの學資の半を送らん事を乞ひぬ、他は自ら勞働りて學んと望みけり。學びの道に進まんこそいと願はしけれと思ひ定めぬ、されど勞働を爲さんため惜しまれし時を費せしぞ口惜しかりける、許多の友人が障碍なく書よむを見ては思ひ出て、若此勞力の時を勉強に費したらんにはと嘆息せし事も多かりけり、木茂らんとすれば風伯來つて惱ます、花紅ならんとすれば雨師之を散らす、何れ不如意の事多かる世にぞある、思いのまゝに學

び得ざりしも是非なき事になんある。

いと悲しき内に更らに悲しかりしは衣服のことにぞある、書生の身にしありければよき衣服とては用なし、されど冬夏の寒暑、春秋の温冷、時に應じ、候に從ひ、擇ばん衣服は要すめり、友人多くは家より送らる、余は自ら購ひき、購なはん金を辛ふして得たり、得れば新物を求めまく思ひぬ、古衣服は破れ切れんも新物だに得ば足りぬと思ひし事もなかりき、止むなくして衣服を購ないける時は嗚呼之を送り與るゝ人ならんには新物を購はんにと思ひ、亦身の不幸を忍び、なき父母を思ひ出て涙に咽びしぞ是非なかりける。

今はされば兄弟すら牆垣に鬩ぐの理り、況してや遙々數百里の滄波を渡り、或は迢々萬山千水を越えて、西東南北より集ひ來る學生の交情をや、親しまぬもの多きも理りぞかし、誠に人は罪惡に染み、世は澆季となりぬ、四海同胞とは古昔に云ふのみ、心中竊かに白刃を藏し、人をし見れば仇敵とぞ思ふ、至誠至愛のもの天外より見給はゞ、嗚呼世は萬魔千鬼夜行の場に異なるなけん、余は學びの窓にありける内に人々のつれなきを見て常にかく思ひぬ、されど今の世の樣をなせる今の人の罪にのみ歸すべからず、古來幾百千年の間幾萬億の人、惡を積みて遂に斯はなりぬ、形きなき世の末迄思ひやられて悲し。

心の中は如何あらん、打交はり言葉替はす樣皆打とけて親しむ樣なり、左挈右提して行步し、共に起き、共に寢る迄睦じく見ゆ、されど一朝相別れ、遠く去るに於ては亦昔日の交情なきものゝ如し、去るものは日に疎しと、昔しの人の云ひけるは違ふ事なし、嗚呼人情紙よりも薄すく、友情は露よりも脆ろし、誰れか世は澆季ならずといふ、余は幾多の友人と交らひ常に斯く思ひし。

父上失せ玉ひし後は母樣にのみなりとも孝養せんと日夜心に祈へぬ、余は四年にして科程をふみ終んぬ余は一と度び故郷に歸りき、母上は余を見てものをも云ひ玉はず、御泪にくれさせ給ひけり、云はぬは云ふにいやまさる、數滴の落涙に萬斛に愛情あらはれけり、父上失せ給ひしより打萎れさせ給ひしとぞ、身體も衰弱し、心細げに見えぬ、余は此時始めて母上の余を愛し給ひしを知りぬ、余が先きに如何思ひけるは誠にひが事とぞ悟りける。

余が故郷に止りたらんには母上に孝事し侍りつらめ、如何にせん、余は青雲の志望止む能はず、再び都に上りぬ、刻苦精

業漸く緒につく、今や天運因に膺り、素志を遂する時近づきぬ、母上を迎へ、餘年を樂しく過させまつらんと思ひぬ、嗚呼宿望全からずして此に病魔に犯さる、四隣靜かなる時獨り病床に在り、一父兩母の山海の洪恩をも報せず、未た志成らず北邦一塊の冷土に消え去らんとす、年を享くる僅に二十余年、空しく千歳の憾みを抱くと思へば熱涙血に和して流る、故鄕に在ます母上は如何に暮し給ふらん杯心にかゝりては苦痛の中に暫しまどろむ時、夢魂宵々家鄕に到る、

世に墓なき事ども繁きが中に若き男女の猥りに相親む事にこそいと空しき業多かれ、人は自然に愛情ありて相愛す、只理を知らず、道を悟らずして猥りに愛慕するぞ憐れある、余が都にありける時或る處女と交らひける友とぢありき、如何なる事情ありけん、百年の契り、仇となりぬ、余の友人は眞心より思ひつめたりけりな、氣も狂ひ、心も打亂れたる樣となりはてぬ、處女は浮雲の如く浮きたるたをやめなりけん、亦思ひ慕ふともあかりけり、誠にたのみがたあき女子も多かるめり、何れ定めなき人心と知りせしが分けてたをやめは頼み難かり、余が見聞せし事を斯くものせんも後の若人の戒ともならんを望むのみ。

寄書

世の貴婦人に訴ふ

髙存野史

語に曰く、疾痛慘怛して天に喚ばざるものはあらずと。今や我が全國の細民は疾痛慘怛して天に叫べり。世間もし天に達するの聲ありとせば、今日貧民號泣の聲は確かに其の最たるものならざる可らず。然り而して此の天に徹ろく貧民號泣の聲は、未だ世の貴婦人の心膽を感動するに足らざる乎。

米價の暴騰は直接に彼等の食物を奪ひ、產業の不景氣は間接に彼等の常職を奪ふ。雨を從かし暑を冒かし風に擊たれ塵に舞はれて粒々辛苦するも、其獲るところは以て其の労を償なふに由しなく、仰いで父母に事ふる能はず、俯して妻子を畜なふ能はず。燕雀且つ飽くを得ずして糟糠を食ひ、糟糠尙ほ足らずして菜花を嚙み、氣息奄々、朝たの露命、夕べを期せず。其の極、遂に路頭に行倒するものあり。溝瀆に轉死するものあり。樹に懸かりて鳥の餌に終はるものあり。水に投じて魚の腹を肥やすものあり。或ひは所在富豪巨商の家に入りて救助を迫まり、或ひは强談を以て補塡を脅やかし、或ひは米穀を他に輸送することを抑へて其の價の騰貴せざるを要むるものあり。此の頃日佐渡國相川の貧民が蜂起暴動して、遂に之れが爲めに鎭臺兵をまで出だすことを要するに至りたるが如き、小人の窮して斯に濫する、其の罪惜むべしと雖ども、其の哀情は眞に憫れむべし。蓋し彼等の意に以爲へらく「飢渴は身に迫まり妻兒、傍らに啼くの慘狀に對して徒らに味氣なく斯の世に窮死せんよりは、寧ろ飽煖者と共に斃れて死せんにさ」乃はち人の家を燬ぶり人の財を奪ふて憚からず。嗚人の窮して將さに斃れんとするや、寧ろ未だ其の窮を知らずして飽煖を恣まゝにする者と共もに斃れて後ちに恨みなしとするに至る也。民貧則邪念生、人乏則盜心發。邪念盜心は遂さに惡の甚はだしきものなり。而して貧と乏とは能く民人をして此の惡を犯かさしむ。況はんや之れに加ふるに、虎列剌病の漸やく將さに流行せんとするを以てす。吾人竊かに將來を恐るゝ所ろなくんばあらず。願ふに一念茲に到り、誰れか凛然として寒心せざらんや。貴婦人諸君にして心あらば、決して之れを傍觀するに忍びざるべし。

吾人は嘗つて輸入龍動新聞を閲したるに、穀價甚はだ貴さく加ふるに時方さに氷寒するを以てし、龍動市中の貧民は饑寒を道傍風雪の中に訴ふるの狀を畫き、又側はらに一富貴の女子が盛粧美服して、驕馬に駕したる華麗の車中に穩臥しつゝ、斜眼に右の貧民を視て徐ろに其の前を過ぎさるの圖を寫し、而して彼の女子が其の御者に向ふて「彼等何爲れぞ獨り悲慘するや」と云ひたるの言を載せたるものあり。蓋し齊樣富貴の人が常に貧家細戶の情を察することの疎なるは、東西同一の嘆にして、即ち輸入龍動新聞が之れを寓言したるものなるべし、今夫れ我が流行(ファッショ)社會(ナブルソサイチー)の貴婦人達は果して此の弊に陷ゐることあらざる乎。銀燭は歌舞綺羅の筵を照らす、而して逃亡の屋をば照らさず。驕馬高く嘶いて大道を往來す、而して窮民呻吟の聲は耳に入らず。花の帽子や、ダイヤモンドの指環や、錦綾羅紗、穩かに體を纒ふて、婢僕左右に侍べり、昨日は花見、今日は劇觀、殆んど虛日なし、下等社會の疾苦は安づくにか在らん。或ひは饗應の宴會あり、茶の湯の案内あり、嬉笑歡語の聲宵より曉に達し、或ひは西洋の料理あり、龍鳳の恋笑あり、獨り口腹の快樂を占め、傍らに饑死する者あるを顧りみず。賤づの女は百結の襤褸さへ身に蔽ひ難きに、時めく姬は美服、驕馬に誇がりて得々たり。貧しき姉妹は缺けたる茶碗、破ぶれたる蒲團を以て浦の苦屋、賤が草舍に蓬頭赤脚の父子と相ひ對して泣き暮らすも、鹿鳴館裏の佳人才子は浮かれ浮かれて偏へに夏の夜の短かきを恨むのみ。紙幣多く散じ粧飾多く加へ、今夫人の風采は優雅を盡くし、令嬢の首腕は金、燦爛として玉、輝耀せり、復た人生憂患の何者たるを覺ふるに由しなく。高樓に起臥し、畫閣に昇降しつゝ、晨には陽春白雪の音樂を翫び、暮には過雲落花の舞踏を樂しみ、曾つて米の價ひを知らず。斯くの如きは吾人が世の貴婦人の爲めに切に取らざるところなり。吾人は固より貴婦人たるものが斯かる事なかるべきを信ぜんと欲す。若しそれ無事の小民が流離顚沛の慘況を目前に現するも、甚はだ以て意に經せず、只だ徒らに奈何んとも致し方なしと謂ひ去つて、其の之れを奈何んともすること無きの責めを分疏せんとするがごときあらば、吾人豈に其の無情なるに驚かざるを得んや。夫れ綱維摩の疾めるや、衆生の病めるを以ての故に菩薩も亦た病めりと云ひき。我が貴婦人達は其の外面に於てのみならず、其の內心に於ても、如菩薩(にょぼさつ)なる可し。果して然らば今ま同胞衆庶が疾痛慘怛の狀に接して、當さに深く之れを憂ひさし大ひに之れを恤ふべき筈なり。

凡そ婦人ほど涙脆ろきものはなく、女性ほど物の哀はれを知るものはなし。其の袖は潮干に見へぬ沖の石の人こそ知られ乾はく間もあらず、奧山の紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲を聞いて轍はち悲しむ。是れ則ち婦人の美德なり、是れ則ち女性の特質なり。然り、彼等は實に小なるとに泣く。然れども請ふ忘るゝ勿かれ、獨り小なるとに泣くのみならず、更らに進んで大なるとにも泣かざる可からず。蓋し男は剛なり、女は柔なり。男は陽なり、女は陰なり、男は活潑なり、女は沈靜なり。男は豪放なり、女は周密なり。男は鼓動的なり、女は平和的なり。造化の配劑乃はち然るなり。故に慈善の事の如きは、最も女子に適當なる事業といふべし。否な其の上帝より特命せられたる職分なりと謂はざるべからず。今や我が一般細民の疾苦は頑婦をして覺へず泫然たらしむべく、慈姿をして坐ろに惻然たらしむべし。況はんや善く悲しみ善く哭する我が美質の姉妹に於てをや。看よ看よ爾等の四圍は、爾等の來りて熱心盡力せんことを待てり。天使の如くに斯の苦界に降りて、可憐の同胞を救濟せんものは、爾等にあらずして誰れぞや。爾等が其の多情多恨の涙を灑ぎ來つて、奮ふて善德の行ふひをなすは、此の時にあらずして何んぞや。大詩人セクスピヤは慈悲の德を賛して云へり「慈悲は、天上より塲に降る溫潤なる霖雨の如し。慈悲は二重の惠福あり、即ち之れを與ふる人を福ひし、之れを受くる人を福ひす。慈悲は神自からの屬性なり、故に慈悲を施こすは、世の帝王に取つて、冠冕を戴くよりも價値あるなり。世俗の權力も、慈悲の加はるに隨がつて愈よ天權神力に近づくべし。吾人は凡べて上帝の慈悲を祈るにあらずや、斯の慈悲を祈るの念は則はち吾人をして慈悲の施こす可きことを悟らしむ」と。吾人は誇さに言はんとす、婦人は慈悲を行なふ丈け、それ丈け天使の域に近づくものなりと。能く人情の何ものたるを解する我貴婦人よ、老少男女幾百となく幾千となく幾万となく天下に嘵嘵する今日に方り、切に之れに向つて痛痒を感じ、之れに對して同感の情を發揮するは、婦人の眞面目を表はすものにあらざる歟、婦人の本分を竭くすものにあらざる歟、抑も亦た女性の資格を高かむるものにあらざる歟。アゝ悲しむ可き事に對して泣き痛む可き事に對して哭するは、是れ女子の天職なり。當さに恤ふべきものあるも之れを恤へず、當さに憫れまざるべからざるものあるも之れを憫れまず、貴婦人の貴婦人たる所以ん其れ將に安づくにか在る。此の米價騰貴貧民困究の事情は辱けなくも夙に、聰明仁知なる皇后陛下の聖聰に達し、遂に救恤金として當分の內ち每月若干圓を東京府養育院に下賜あらせらるゝ旨仰下ださるゝを致し、尙ほ其れのみならず、他の各府縣下の貧民に就いても

深く叡慮を惱ませられ、時々香川太夫を召して下情を問こし召さるゝと傳ふ。九重の内に在りて心を草茅の間に注ぎ天下の憂ひを憂ひ給ふこと斯くの如し。誰んぞ感謝し感佩せざるを得んや。而して吾人は宮内省の女官及び某々大臣の夫人、某紳商の夫人が此の聖旨を奉戴して、各々若干の金圓を寄附したることを知る。
然れども此の他世間多くの貴婦人達は果して何んぞ。且つ夫れ黄白若干投じ去つて輒はち已むもの、何ぞ必らずしも慈善家なりと謂ふべけんや。徒らに金錢を差出して他に依托したればとて、直ちに以て我が義務了はれりと做す可からず、只だ當座逃がれに、申譯けに、世間の手前を裝ふ爲めに、僅かの寄附をなして自から足れりとし、冷然復た之れを顧りみざるが如きは、吾人の未だ容易に賛揚する能はざるところなり、吾人は敢へて告ぐ、華族の令夫人及び令孃よ、顯官の令夫人及び令孃よ、豪商紳士の令夫人及び令孃よ、并びに其他尊れく一般の貴婦人よ、卿等の財は裕かにして卿等の業は閑なるにあらずや。奚んぞ一滴千金の紅涙を揮ひ、身を獻じ、魂を捧げて飽くまで斯の民の爲めに勞せざる、奚んぞ速やかに相ひ會じ相ひ合じ、戮力協議し、慨然大擧して以て其の救濟を圖らざる。嗟呼今日海内幾多の貴婦人中に於て、能く貧民救助に對するナイチンゲールたらんものは、果して何人ぞ。

文論

みれ子

●陸前ゆう子様　本誌百八十九號にて御答へ申上し一度用ひたる毛糸を元の様にする方法につき南越福井の大宮光子様となん云はるゝ御方より經驗せられし所を申し來りましたから此處に掲けて御參考に供します、通常の古き毛糸なれば先づ初めに風に卷き直し、湯の沸騰する鐵瓶若くは土瓶を取り去り其湯氣の立つ上に毛糸を置きて蒸さば湯氣の力にて新しき糸の如く延びます、ヌスユッチ糸でしたら前の如く先づ始めにかせに卷き直し熱湯（手の附けらるゝ程の熱さ）の中に糸の延る迄（凡そ五分間程）つけ置きて後絞らずして其儘棹に掛け陰乾に致しましたならば元の如くなります。

●靜岡安田氏　明治女學校の創立者は木村鐙子と申す婦人で前年すでに死去されました、傳記は其頃ろ世に有名でしたが、本社發兌の嚴本編輯、木村鐙子小傳に十分書き載せてあります。

●仙台一學生　押川方義氏が明治學院長とならるゝ相談は何如になりしかとの間ひ、双方に種々の事情ありて遂に成らざることとなり、押川氏は彌よ仝地にて神學校を起るとに決心せられたやうです、東京の爲めには殘念です。

時事

○逆外國

條約改正論以來、アンチ、ファーレン（逆外國）とも云ふべき氣風激發し、さまゞゝの不快事を惹せり、吾人は決して之を善き事と思はず、邦民が見識の狹きと度量の小さきとに歸して、歎ぜずんばあらず。左れど西洋人も亦た注意する所ろなかる可からず、神州の民を一等の劣人種の如く見做し、洋語が話せぬときは智識なきものゝ如くに思ひ、基督教を信ぜざれば善惡の判斷なきものゝ如くに信ずるに至りては、傲慢も亦た極まると云ふべし。蓋し此等の間だに立ちて能く謙々温々たるものは獨り宣教師なるべし、宣教師は其博愛の德を以て、其足を洗ふの精神を以て、我が日本人の爲めに肉をも食はざる決心を爲すべし、之れ今に於ける彼等の責任なり。然るに宣教師にして若し俗々たる平凡の外國人と異なるとあらずんば、洋人の美風何の日にか顯はれん、此如き宣教師は、啻に基督教の敵なるのみならず、亦た外國人の敵なり。

○女學校

女學生半ば減じ、歸國して裁縫を事とす。論者曰く、女には學問を要せずと、又云く、女には女大學にて宜しと、彼等が

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學を退ぞくるは、亦た男學を退ぞけたる也、彼等が女權を冷待するは、文明を冷待したる也、則はち自らを退ぞけ、文明を冷遇し、而して揚々自得、我は開化すと云ふ。世もし女學進まずんば、吾人は其進化の正當論據ならざるを知る。

○枚知過門君

枚知君來る、而して今后君やがんが爲めに來ると云ふ。人君が貴族院に入らざるを惜しむものあり、然れども君に對し、内閣諸公の人にあらず、君の天賦は民間にありて發揮し、聞れる源こを啓まし、眠れる心を洗ふ、醒れる氣を生き以らしむるにありつ出世界、民間に此評論あかる可らず、如此く、政界、下にも枚知君あらずんば不可なり。

○日月と笑容

然れども朝廷に吾人が忠言を容にしめば、君臨はくは勅撰に當らんことを、而して君試しみて之を顧しまつらんとを。然らば、帝の功臣を優待わらせ玉ふ聖徳日月の如く、君が笑顔を守るの微笑容の如けん、共に賀すべき也。

○福澤翁、故新島君

宮内省は、福澤諭吉君が多年人材を教育し士運を翼助する其功勞浅からざるを奇特に思召さるゝとて金千圓を下賜したり、帝室、文を奨勵するの好事として、道の爲めに大ひに賀すべし。左れど翁と共に奇特の賞を辱けなくするに値するもの、恐らくは何ほど一人あらん、云はく故新島君は其恩を蒙むることを得ざる乎。日は天が下たに一様に照れり、王者の徳澤、至らぬ隈なしとは申す也。

○若きに謝す

炎熱きびしく、土用三郎恙がなし、コレラは忌むべしと云へども、暑氣の強きは賀すべき也。天久しく旱土に災ひせず、秋の収穫望み多き心地す、つゝしみて感謝す。

○學生及び世界

學生四方に散じ、自然の景々たる草木を見ると共に、古しへの哲家多く寄落し、與政年ば倦れ、修學熱たゞしく途に横はるを見ば、彼等が爲めには万卷の書を讀破せしよりも猶多くの教へあるべし、學問は學問する爲めに非ず、學生修文の經悟之より一變せんことを祈る。

○日本の財務明日より亂雜せん

論壇第一の問案何ぞ、人多く云はく、政費節減、憲法解釋、と、然れども憲法は議會の爲めに解釋すべきものにあらず、毀日の爲めに預じめ討論するが如きは政治家の卓識にあらざ

る也、然らば政費節減の論何處より初めん、云はく政府は一切の出納脈を公告して議員の明察に委すべし、議員は議員俸給五十万圓を全廢することを建議すべし、上下先づ如此く公明正大にして、而して后ち真正着實の會計論を得べし、若し不平と激憤とを以て會計を論ぜんには、日本の財務は明日より亂雜せん。

○井深梶之介君

未だ嘗て洋行せずして洋語を談ずること千百の洋行歸朝者よりも巧みなり、未だ嘗て大學に入らずして米國の大學は遂かに學士號を送呈し來る、君が榮譽凡ならずと云ふべし。今や君初めて洋行せられんとする也、思ふに英米知名の士は皆な君を歡迎すべし、此時に於て君に一の大責任あり、夫れ從來の洋行者は大抵彼地の神學者傳道者等に縁うすく、信用を蒙むること濃なるを得ざりき、斯て痛論す、其用ひらるゝこと決して大ならざりし也、然れど君の如きは然らず、君一と度び口を開けば既に常例を舉げずして彼等早く之に信ぜんとす、故に吾人は君に熱望する所ろのものあり、君願くは日本人の實情を正報し、日本人は最早十年前の傳道師を要せず、最早十年前の傳道法に適せず、其正に要する所ろのものは、社會上、事業上、學理上に於ける生ける新たなる傳道者を渴望するに在ることを痛論し、又た日本人が實權を握れる基督教主義の學校を盛んにするは、最確最實の傳道法なるがゆへに、之に向つて教師を送るは無上の良傳道なることを説法し、在日本宣教師の報告に據らず、半日漫遊者の夢の如き演説に迷はず、直ちに君が言を信じて此の大策に從はんことを、熱心に勸告せられんと也。一諾千金よりも重きは君が秀所也、故に吾人は君が此の重諾を得んことを欲す。

廢娼記事

●山梨縣甲府

同地方の廢娼論者は議員撰擧さはぎの間だ暫らく紅な姿じしが、此頃に至るや直ちに今月五日甲府公園地内望仙閣に縣下同志者の大會を催ふし、席上從來の五名の幹事の外に委員七名を設け各郡に分派して會員を募集することに定め、且つ左の六條を議決したり、

來る二十日廢娼大演說會を催ふす事
其后更に一回大演說會を催ふし東京より大家を招く事
縣會に再たび建白する事
知事に建議する事
地方有志者及び縣會議員に勸告することを銘々の責任とする事
會員中體面を汚すあらば勸告の上除名する事

斯て義捐金を募りたるに即席十圓集まる尚追々募集中の由、而して二十日には盛なる演說會あり、來月末頃に東京より同志の者一名派出すべし。

救濟記事

●

三十圓	札幌婦人慈善會
二圓二十錢	福島縣中村婦人親睦會
十錢	同　渡邊ひさ
四圓	明治女學校有志者第二回義捐
五十錢	河内いせ子
五十錢	吉原そさ子
小計	三十七圓三十錢
前回迄	二十五圓八十九錢五厘
總計	六十三圓十九錢五厘

右婦人矯風會本部へ輸送す

通信

鳥取市

學校は近來少しく整頓し來り中學校、師範學校、因幡高等小學校等は外面上餘程奇麗になれり、然れども教師の進歩せざるは學校の外面に比して甚しとす、殊に鳥取の學生は道德的感化力を受け居らざるとは歎息の至りなり」女學校は鳥取英和女學校、鳥取女學校(私立)及び因幡高等小學校女子部と師範の女子部なり。鳥取英和女學校は三年前より始め今四五十名の生徒に及べり來學期より米國婦人三人(内醫學博士ホールブルック孃音樂師ローランド氏ストーン孃)と神戸女學校卒業生二人の教ゆる都合なり基督教主義なるを以て縣廳の學務官吏は之を度外に置き市へも之と同感にて爲めに生徒の少なきは致す可きとなり。鳥取女學校は七八十名の生徒を持ち甚だ低き學科を教へ居れり高くして師範女子部へ入るの準備に過ぎず他は裁縫筆算の一部を教ゆる位なり是の學校は官吏數名の寄附を以て立ち尙ほ創業日淺くして左程の看なし而して之を世話し居るは鳥取婦人會なり鳥取婦人會は重に官吏數員の夫人を以て成立ち外形殆んど基督教に反對する婦人の組合の如し併し其の鳥取女學校の爲めに働かるゝは隨分勉强にて感ず可き處もあるなり。因幡高等小學女子部は甚だ盛にて四百名程の生徒あれども田舍より來る生徒の非常に乏しきは未だ進歩せざるの徵となす可きか。師範學校女子部は今年始めて出來しものにて十餘名の生徒あり此の生徒の内一名の基督教信者ありしが(尤も信仰を殆んど失ひしものなりし)入學の際學校の職員の或るものゝ之れに基督を棄つ可きを說き十字架を踏み付くるを勸めたり而して其の女子は之を諾して入學せりと云ふ」是の外製糸場(縣立)にて貧しき士族の女子を集め實業を勸めしめ居れり百名内外なるが監理は道德的の方は左程宜しからず併し皆貧窮なる爲めの故にやり別に不都合なる事の起りしを聞かず其の他女子にして他國に遊學する人十指を屈するに足らず右以て一般御推知ある可し。

又幼稚園一ヶ處あり四十名の生徒あり併し是は先日創立せしものにて十分云ふ可きものなし万事整頓するは尙ほ餘程の骨折を要す可しと思はる。基督教は鳥取基督教會に百餘名の信徒を有す天主教の講義所もあれども甚だ微にして人目を引くに足らず又基督教靑年の靑年會あれども微なりこの靑年會嘗て廢娼運動に付き働かんとせしも當時疲れたる如く寂として聞へず又た佛教靑年會なるものあれども此れも名計りのものゝ如く勢少なし。廢娼運動は未だ起らずと云ふも不可なかる可し鳥取人は左程之れに反對するものなし又僅小の娼妓を廢するは別段造作もなき事のようなれど何分貧窮書生の多き故未だ事業に向ての熱心を持つ能はざるものゝ如し。

女報

●但馬　鳥取の人、神戸女子傳道學校の寛りき女史は此頃豐岡に於て、同じく加藤ノサ女史は村岡に於て、切りに傳道に從事せらる(出石通信)。

●西京　京都婦人共勵會は是迄禁酒會とは別なりしが今度愈々合併し而して同會の内へ慈善部禁酒部の二部を設け先づ慈善部には貧兒學校を設立することとなりたる由(西京通信)。

●靜岡　靜岡尋常師範學校女子部に於て十九名の新卒業生あり今月下旬より縣下各郡の小學校に從事すべし本縣に於て正しく明治の新教育を受けたる女子が地方に出て教職に從事するは今回を以て嚆矢となす。靜岡市に一の女學校あり有志者の寄附金を以て成立つ洋人の女教師二名を雇入る。七月十八日夜靜岡市美以教會堂にて矯風禁酒會の演說あり辨士は小林光泰其他二三人あり(靜岡通信)。

●鳥取　先月來鳥取市の有志相謀り貧民救濟の目的を以て慈善有志家の義捐を募り種々奔走の末遂に今回鳥取貧民救濟會なるものを起し其の目的を達するに至れり贊成義捐する人は市役所郡役所及縣廳の官吏と有志市民にして今千二百圓の金と四十俵の米を以て百三十人程の貧民に施し居れり其の方法は飢餓及び疾病のものは其の手當をなし勞力に堪ゆるものは大抵日雇工夫等に周旋し又資本の幾分を助けやる等の由なり。今回鳥取尋常師範校々長兼縣廳學務課々長なる松村秀實氏は福島縣の郡長に轉任したり氏は深沈なる勉强家にて鳥取婦人會などには餘程盡力せられ學校教員の人望は隨分持ち居たり之を惜しむ(鳥取通信)。

●神戸英和女學校よりの洋行生　ギュリキ、まさ女史は廿七日發の船にて、マウント、ホリヨーク女大學(前にエスレーと記せしとありしは誤まり也)へ向け、塚本よし女史は。……に向け、來月七日發の船にて出航せらる。

●天竺寡婦の再婚　漸やく行れ來り過る六月十一日初めてありしが此度又々之れあり、而もブラマ教式を堂々實施して之を確かめたる由、六月廿一日のボムベー、ガーデアンに見ゆ。

●カムブリッヂ大學　の古典科最高試驗(クラッシカル、トリポス)に於て第一位の席を占めたるはマルガレット、アルフホルド孃なり。

●支那の赤兒殺し　とは赤兒を水に溺らして殺すとなるが慘酷にも盛んに行れて中々制止されぬ程なりしが此度いよいよ禁令を發し犯すものは竹杖六十打の罰と定りぬ、あゝ尙ほ輕ろし。

●男のウパ　目下米國に唯一つの男婦學校とも云ふべきものあり即はち紐育のベレアウ醫學校に屬するものなり、然るに其校長はウイラード夫人と云へる女子にて同所の婦學校の卒業生なり、其他の教師監督人も皆な婦人にて此の男のウパを教ゆるものに一人の男教師なし。

●獨逸の女醫　の事は前號にも記事ありしが、此頃ベルリンよりの通信によれば、日耳曼國にては女醫が公けに藥法書及び病死診斷書を認むるとを許さず、又た每度言へる如く大學に入學し卒業して學位を受るとを許さずと云ふ、左れど實際には默許の姿にて診斷療治する女醫少なからず、有名なるは目下ベルリンにある二女史なるべし、一を學士フランシスカ、チベルチヤスと云ふ、スヰツツルランドのチウリツヒ大學の卒業生にして既に十五年間ベルリンにて診察し大ひに流行す。他を學士エミリー、レーマスと云ふ、劣らぬ程の名あり。然るに此秋よりは更に二名の女醫博士來らるべしと云ふことあり。

●英領カナダ第一の富める女子　はシャーロッテ、ニコルス夫人なりとの聲れありしが、同夫人は五月二十日に死去せり、遺産二百万弗ある中ち遺言して五十万弗を所々の長老慈善會へ寄附したり。

●ラマバイいよいよ盛んなり　彼女は又々印度内國を周遊演說し到たる處ろ歡迎せられて彼學校々費を募集せり、中にも尤も歡待せられたるはハイデラバッドなるべし、同所にては即席二千ルピーの寄捐金を得たり(一ルピーと云ふに金と銀とあり、金ならば七弗ゆへ一万四千弗なり、銀ならば五十錢ゆへ一千圓なり、通信の文字不明なり)。

●英國婦人禁酒會　の年會五月廿三日にあり、ブライト、ルーカス夫人死去后レデー、ヘンレー、ソマーセット其會頭となれり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

東洋英和女學校廣告欄

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の敎員孰れも熟達善良あり然して本校の敎授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所あり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地　**東洋英和女學校**

廣告

●○脚氣患者諸君よ左の○●

廣告を讀んで世に名灸有るを知り玉はんことを

官許專門 天下無比　**●かつけ根切灸點術●**

附言輕症は一二度如何ある重病と雖ども四五度限り全治受合○灸治効能男女を論せずかつけは勿論膝より下の冷て痛む病に大効ある事受合論より證據實驗あれ○當時拙家近邊に類似の家號名乘る同業者出來たるに付番地家號篤と御注意の上陸續御來車あれ

京橋區本材木町三丁目二十一番地松屋橋通り　**壽福堂**

梅花女學校

(大阪) 梅花女學校

生徒新募

申込期限八月廿五日マデ
入學試驗九月一日午前九時
全級ヘ入學ヲ許ス○規則書ハ郵券二錢ヲ要ス

(土佐堀) 梅花女學校

梅花女學校

香蘭女學校生徒募集

麻布永坂町一番地

今般校則を改良し本科豫科小學科の外更に尋常小學科を設け九月十日より敎授す
寄宿舍取締及英語講讀女敎師各壹名雇入度御望の方は當校へ御來談あれ

東京市芝區三田切通町三十番地　私立　**普連土女學校**

●學事新誌第三號目次

七月十五日發刊定價四錢

○敎育譚
米國學生ノ生活　パチエローオフアーツ 山口大造君
日本ノ敎育　文學博士 外山正一君
○學校規則
官立編專門學校ノ部、帝國大學一覽。官立編普通學校ノ部、東京府尋常中學校規則○高等師範學校規則、第一高等中學校規則。○私立編專門學校ノ部、日本法律學校規則○慶應義塾大學部規則。私立編普通學校ノ部、共立學校規則
○學校入學試驗問題
第一高等中學校試驗問題○專修學校試驗問題
○學生ノ品行勤惰
國民英學會
○秀拔
Valedictory Address. Andō Yasaburō.
○雜報
數件

發行所　東京京橋區臺町十二番地　**學友社**

發賣所　東京市神田區雉子町三十二番地　**團々社書店**

女學生募集

本校豫科本科ニ入學志願者ハ九月八日迄ニ來校アルヘシ校則入用ノ方ハ郵券二錢ヲ送ラハ呈スヘシ

仙臺市東三番丁七十五番地 **宮城女學校**

通信女學

講義錄第一第二再版 第三卷皆 第七卷出版

通信女學は學校に通はれぬ婦人が家に居て獨學する樣當今の女が心得べき學問を悉く講義し、一日四枚宛讀む時は家政、育兒、看病、衛生、生理、漢學、和學、英學、歌、作文、算術、動植、理化學、万國及日本の歷史、並に地理等を一年にて卒業し女學雜誌社の卒業證書を受くるの規則なり講義錄の文章は分り易く一々假名を附け且繪を入れ尚不明瞭の所は質問に答へ專ら信切を旨とし學校にて直ちに教授を受くる思あらしむ毎月々謝卅二錢拂込の人には二百枚余の講義錄を送る目下既に第七卷を出版したれとも、今月新たに入學する者は其第一卷より順次に稽古するも可なり、

一冊代卅二錢(無郵稅)半年前金一圓八十錢、一ヶ年前金三圓五十錢女學雜誌購讀の人は一割を減ず

女學生

第三號出版

右二誌發行所 **女學雜誌社**

林學生星野愼著

昆蟲 植物 金石 採集法

定價拾五錢十四日發賣

小形ポケット用、假名附き圖入り、表紙彩色美裝、九十ページ

暑中休暇は採集の好季なり、此季今にあし 學想あるの少年、旅行、散策する時、溫雅の女生、庭園山水に逍遙する時、虫を捕へ植物を集め、若くは岩を見、土を識らまくするの案內者として又**朋友知己への歸省の土產物として、**此美麗な、小形な、有益な、廉價な、此氣の利きたる書物出版せり其「昆虫界」には虫の別け方、採り方、殺し方、正則の刺し方、貯へ方、送り方、養ひ方等、其『植物界』には日本各植物帶の樹木の名別け、富士山植物帶の高さ、枝の見分け、葉の種類、花の壓し方、臘葉の作り方、標本の躰裁等、其『金石界』には金石の名分け、岩の類別け、土の別ち、石、岩の現はれ方、見分け方、碎き方、送り方、土の分析法、土の採り方、地層地質の觀測法等此他採集携帶一切の道具等、其重もなるもの斯の如し、愉快多望の暑中休暇來れり、ア、何ぞ一本を購はざる。

明治廿三年七月 **女學雜誌社發兌**

明治二十三年七月廿五日印刷
明治二十三年七月廿六日出版

東京麴町區富士見町二丁目一番地
發行所 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留 森田豐

遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學生募集

本校豫科本科ニ入學志願者ハ九月八日迄ニ來校アルヘシ校則入用ノ方ハ郵券二錢ヲ送ラハ呈スヘシ

仙臺市東三番丁七十五番地

宮城女學校

通信女學

講義錄第一第二第三卷皆**再版**第七卷出版

通信女學は學校に通はれぬ婦人が家に居て獨學する樣當今の女が心得べき學問を悉く講義し、一日四枚宛讀む時は家政、育兒、看病、衛生、生理、漢學、和學、英學、歌、作文、算術、動植、理化學、万國及日本の歷史、並に地理等を一年にて卒業し女學雜誌社の卒業證書を受くるの規則なり講義錄の文章は分り易く一々假名を附け且繪を入れ尙不明瞭の所は質問に答へ專ら信切を旨とし學校にて直ちに敎授を受くる思あらしむ毎月々謝卅二錢拂込の人には二百枚余の講義錄を送る目下既に第七卷を出版したれとも、今月新たに入學する者は其第一卷より順次に稽古するも可なり、

一冊代卅二錢(無郵稅)半年前金一圓八十錢、一ヶ年前金三圓五十錢女學雜誌購讀の人は一割を減ず

女學生

第三號出版

右二誌發行所

女學雜誌社

林學生星野愼著

昆蟲 植物 金石 採集法

小形ポケット用、假名附き圖入り、表紙彩色美裝、九十ページ

定價拾五錢十四日發賣

暑中休暇は採集の好季なり、此季今にあし學想ある少年、旅行、散策する時、温雅の女生、庭園山水に逍遙する時、虫を捕へ植物を集め、若くは岩を見、土を識らまくするの案内者として又**朋友知己への歸省の土產物として、**此美麗な、小形な、有益な、廉價な、此氣の利きたる書物出版せり其「昆虫界」には虫の別け方、採り方、殺し方、正則の刺し方、貯へ方、送り方、養ひ方等、其『植物界』には日本各植物帶の樹木の名別け、富士山植物帶の高さ、枝の見分け、葉の種類、花の壓し方、腊葉の作り方、標本の躰裁等、其『金石界』には金石の名分け、岩の類別け、土の別ち、石、岩の現はれ方、見分け方、砕き方、送り方、土の分析法、土の採り方、地層地質の觀測法等此他採集携帶一切の道具等、其重もなるもの斯の如し、愉快多望の暑中休暇來れり、ア、何ぞ一本を購はざる。

明治廿三年七月

女學雜誌社發兌

明治二十三年七月廿五日印刷
明治二十三年七月廿六日出版

東京麴町區富士見町二丁目一番地
發行所 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留 森田豐

遞信省認可

女學雜誌

第二百二十四號目次

社說　論說　批評　雜錄　小說　寄書　時事

細君內助の辨
女子敎育の私見を述て巖本兄に寄す（寺尾熊三）
春江文章○明治學院に對する記事○閨后の囁き（末松謙澄）
慈善問答○女子文學者○カウパーの詩○小松崎古登女を訪ふ○深夜の星○口に毒ある人○淸めぬ庭うき世
華族女學校卒業式に於ける、學監下田歌子女史の演說○思ふまゝ新らしき集會及政社法○是れ政談乎○研究せんとを欲す○猶ほ流水の如し○博覽會場女人禁制の場所○子守堂若衆倶樂部○結婚媒妁所統計○世間忙々○何處に同志者ある○此頃の新聞紙○雜報の造り手○ギウリキ女史○ピアノ及びチルガン○禁酒上運動○フホーセットト女史の名譽○卒業女學生○婦人矯風會○佛和女學校○看病婦學校○女學校と師範學校女子部○吉祥女學校○長濱婦人會○萬國矯風大會○スチッド氏の懸賞○レビット夫人○廢娼記事○通信○週報

Let no one say, the children will not understand it, for thereby he deprives them of their greatest good.—Froebel.

通信女學

講義錄 第一第二第三卷皆再版第七卷出版

通信女學は學校に通はれぬ婦人が家に居て獨學する樣當今の女が心得べき學問を悉く講義し、一日四枚宛讀む時は家政、育兒、看病、衛生、生理、漢學、和學、英學、歌、作文、算術、動植、理化學、万國及日本の歷史、並に地理等を壹年にて卒業し女學雜誌社の卒業證書を受くるの規則なり講義錄の文章は分り易く一々假名を附け且給を入れ尙不明瞭の所は質問に答へ專ら信切を旨とし、學校にて直ちに敎授を受くる思あらしむ毎月々謝卅二錢拂込の人には二百枚餘の講義錄を送る、目下既に第七卷を出版したれとも、今月新たに入學する者は其第一卷より順次に稽古するも可なり

一冊代卅二錢（無郵稅）半年前金一圓八十錢、一ヶ年前金三圓五十錢

女學雜誌購讀の人は一割を減ず

東京富士見町二丁目一番地

女學雜誌社

八月二日發兌　第二百廿四號　一冊定價六錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY